

セシル・アンドリュ

生成するテキスト——消すことから実存へ

セシル・アンドリュは、一貫して文字を消している作家である。彼女は、テキストを読みながらその文字を修正液で消す。しかし、一体何故彼女は文字を消すのだろうか。文字を消すことにどんな意味があるのだろうか。ここでは、このような素朴な問いを立てることによって、その営為の意義を考えてみたい。

文字を消す方法による彼女の最初の作品は、『定時課』[図1]である。それは、サルトルやメルロ・ポンティなどの実存の問題を考察したフランスの思想家、あるいは荒川修作や李禹煥といった日本の美術家の書いた本を実際に読みながらその文字を修正液で消し、それらの消された6冊の白い本を床に並べたインスタレーションであった。見る者は、本の前に置かれた黒い台の上に跪き、屈みこむようなかたちで直接本を手にとることになるが、この黒い台によって、観者が床に置かれた本を単に眺めるだけで終わってしまう事態が回避され、あたかも聖書を読むような厳粛な心持ちで積極的に本と接することが可能となる。

また最近では、本ではなく、般若心経の文字を消す一連の作品[図2・3]を発表しており、今回の出品作も、般若心経によるものである。般若心経の場合、文字を消す方法は、経典の文字を直接修正液で消す方法と、経典の上に半透明の写経用紙を置き、下から透けて見える文字を消す方法の2通りの方法がある。いずれにせよ、般若心経は262文字の比較的短い経典であるため、文字を消す作業は毎日規則的に行われ、その一連の営為は日々の祈りにも似た儀式となっている。365枚の消された般若心経を御影石に嵌め込んだ出品作『365日間』も、こうした儀式の365日間の集積である。

このようにセシル・アンドリュは、一貫して本や経典の文字を修正液で消している。言葉を消すことは、勿論サルトルらの本や般若心経を軽蔑しようとするのことでない。制作活動の最初から実存の問題が中心テーマであったというアンドリュにとって、寧ろこれらは非常に興味深いものであった。人類の文化遺産である本や経典が、我々人間に多大な影響を及ぼしていることは動かしがたい事実である。しかし、実存そのもの、自己の現実の存在そのものは、決して言葉では捉えることは出来ないのではないか。この疑問が、彼女を実存の問題に関する本の文字を消す「行為」へと導いたのではなからうか。

テキストを読むこと。それは、読み手がテキストに書き手が託した一義的な意味を読み取るばかりでなく、テキストに内包された二義的、三義的な意味を主体的に発掘してゆく行為に他ならない。すなわち、テキストを読むということは、読み手によって新たなるテキストを生産することなのだ。アンドリュによって読みながら消されたテキスト。それらは、テキストからオブジェへ、読まれるものから見られるものへと転化することによって、テキストの一義的な意味を後退させ、二義的な意味を開示し、テキストを生成するテキストとする。そして更に、テキストを黙読するのではなく、修正液で消しながら読むという積極的な身体の間与によって、アンドリュが今ここに存在しているという実存の問題が具現されることになる。修正液の独特のタッチや微妙な色彩を持つ消されたテキスト。それは、まぎれもなくアンドリュ個人の実存の痕跡であり、見る者はそれらのテキストに直接触れることによって、作者の実存を体験し、そして自らの実存をも身体を通して知覚することになる。

今回の『沈黙』を中心に構成されたシンメトリーな会場空間は、

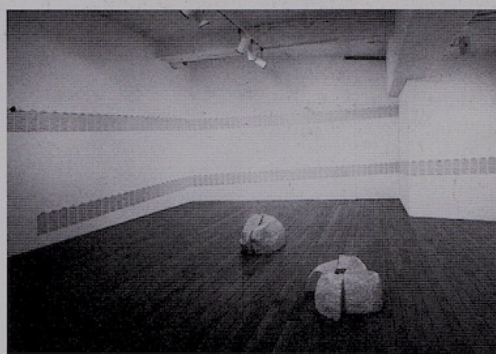
静謐そのもので、古い教会の荘厳な構造を想起させる。ここで留意すべきは、彼女の作品はその冷たい表情とは裏腹に、常に観者の積極的な参加を促すものであることだ。そうした意味で、彼女の作品は、ミニマルな様相を呈しながらも、見る者は遠目に眺めるしかないミニマル・アートの無表情な作品とは一線を画す。床に1400個余りの大谷石が敷き詰められた『沈黙』では、鑑賞者はその石の上を歩き、そしてその石片を持ち上げることによって消された般若心経と出会い、『祭壇』では、土の中の銅管から丸められた和紙を取り出すことによって、消されたテキストと出会う。実存の問題は、こうした身体的な行為を介してしか本来考察され得ないものかもしれない。

文字を消す行為。その行為は、言葉を否定しつつも肯定するという両義性を持つ。彼女は、テキストの文字を消すことによって、言葉を無にする一方、テキストに新たなる生命を与え、作者の実存を呼び戻す場を生み出す。アンドリュは、こうした営為によって実存の問題を探求し、見る者に言葉との新たな出会いの場を提示する。

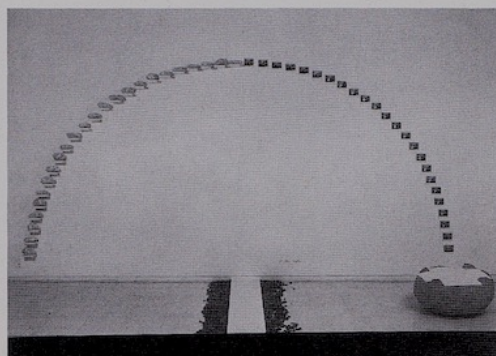
(滋賀県立近代美術館 学芸員 高橋佐智子)



[図1] 「定時課」1988-1990



[図2] 「言葉以前の場」1990-1991



[図3] 「24時間」1990